

〈記念座談会〉

経済学の原理を求めて
—— 馬場元二先生を囲んで ——

聞き手 水 野 五 郎
 萬 谷 迪
 元 田 厚 生
 岩 崎 徹
 小 島 基 男

は じ め に

司会 これから、馬場元二先生の古稀記念の座談会を始めたいと思います。

本夕は、諸先生方には、大変お忙しいなかをわざわざ時間をさいてお集りいただきまして、ありがとうございます。

馬場先生は、創設したばかりの札幌大学に赴任されてから20有余年、大変なご苦勞をなさってまいられたわけですが、しかし、同時にご自身の長年の研究課題たる経済学の根本原理の追求は一貫して続けてこられております。本日は、日頃、勉強のうえで、先生と親しくおつきあいいただいている皆さんを中心にお集りいただいたわけですので、先生のきわめてオーソドックスな研究スタイルの裏側とか本音の部分などを、ざっくばらんにお聞きしていきたいと思ひます。

(1) 八女中学時代

Q：まず、先生の生い立ちからお話いただけますか。

馬場：私の生い立ちといっても、とりわけ他人様とかけ離れたことがあるわけではありませんが、先祖はなかなかの地主だったそうです。私が通っていた中学のある町まで歩いていくと、ずっと私の家の田圃を左右にみながら行けたぐらいだったらしいですが、代々分家を重ねまして、所有規模は小さ

なくなってきましたが、大正時代のはじめ、親父の代にはまだ地主の名残りが残っていました。私自身も相当な規模の田圃や筑後地方で有名な樫畑があったのを覚えております。

親父は非常に政治好きでして、やれ民政会だ政友会だ、と盛んに肩入れしていました。当時は政友会だったと思いますが、大内暢三という代議士がいて、その人に肩入れするわけです。それで、自分の家の財産を使いこんでしまい、選挙が終わるたびに田圃を売るような状態でありました。そういうわけでだんだん落ちぶれて、自作兼若干の地主の状態に転落していました。

当時は、田中定先生が自小作前進論で云われているように、自作が小作に土地を売っていき、その過程で子供は学校へいく訳です。だいたい普通の自作の子供がいくのは師範学校です。自作のいいところに行くのは専門学校、もう少し良くなると医学専門学校や大学に進学します。そこで完全に土地をなくしてしまうというのが一般的でした。私が中学を卒業するころには、売れば自作ができないくらいになっていましたので、進学するためには学資を工面しなければなりません。ある大学の予科に合格することを前提に奨学金を受けるようになったのですが、大学の入試に失敗してしまいましたので、奨学金の方も駄目になりました。そういう状態でしたから、中学を卒業してから村役場に勤めて職員にでもなるかというようなことになりました。

Q：先生の出られた八女中学は奇しくも後に先生の恩師になられる、向坂先生や田中定先生と同じご出身なわけですし、社会科学に対する関心ということで何かあるのではないかとと思いますが。特にどういう少年時代をおくられたかをもう少しお話下さい。

馬場：私は、社会科学には全く関心がなかったのですが、しかし、私が中学に上がる頃は、農村の青年の間では、大正デモクラシーの影響がいっぱいありまして、「資本論」を呼んでいる人もたくさんいました。私の兄貴もそういう人達と一緒にやっていたから、戦後になって兄の蔵書の中に高島沢のペーパー製本の『資本論』があるのを見つけました。やはり研究会をやったあとがありました。それを聞いた訳ではないですが、そういえば5・15事件が起きたときでしたが、中学の帰り道に貰った号外を見て家でたまたま食事の時に「前途有望な青年だったのにね」といいますと、兄貴がもの

すごく怒りまして、「何とぼけてる、あのつまらない奴」といって怒ったことがありました。

Q：当時の八女中学の雰囲気はどんなふうだったのですか？

馬場：八女中学といってもたいして有名な中学ではないです。福岡県でも田舎の中学でして当時、高等学校に4・5名入るくらいでした。それも五高、六高、佐賀高、本州にでまして広島高くらいでした。当時は高等学校に行きますとあとは東大に容易に入学できましたから、結構東大には行っていました。



(2) 横浜専門学校時代

Q：中学を卒業しまして、横浜専門学校にはいられるわけですが、その動機というか、いきさつをお話いただけますか。

馬場：先ほどいったように、役場の職員にでもなろうかといっているときに、担任の先生が横浜専門学校の奨学生のことを教えてくれまして、それでは一つ受けてみようということになったわけですが、これは、うまく引っかかりました。20名合格させていました。しかし、20名のうち、他の学校に合格する人がいますから、きてもせいぜい4・5名なわけです。そういうことで、私も、人並に専門学校に行けたわけです。

Q：横浜専門学校では主にどのような先生方にどういうことを学ばれましたか。

馬場：その点では私は、非常に恵まれたと思っています。一年の時は、中山伊知郎、久武雅夫、他にも、会計学の伊藤正一という先生などがいました。その方々に教わったのですが、皆さん非常に親しみやすい人でした。研究室とは別に教授室というのがあり、今でも残っていますが、講義に来る専任や兼任の先生が、そこにみんな集まりまして、そこから教室に行くわけです。そこにいくといつでも、その日に授業を終えた先生がおられるわけですので、そこへ行って質問はできるし、その他のいろんな話ができるということでしたが、学問をしている先生方は、非常に魅力がありまして、そこに自分からいっていろいろな話を聞きました。ただ、学問の分野といえ、数理経済とか純粹経済学ですから、今日のマルクス経済学を教わることはなかった訳です。ついでながら申しますと、当時、専門学校に高等商業科と貿易科というのがありまして、高等商業科の経済原論の講義は中山伊知郎先生、貿易科の経済原論は園田実先生でした。園田実先生は、おそらく、東大の、大内兵衛先生のお弟子さんだと思いますが、マルクス経済学で、「経済科学概論」という書物を書いていました。当時は、経済原論というのはピンとくるが、経済科学概論とは変な書名だなと思いました。しかし、二年生になったら、園田実先生に金融論を教わるようになったのですが、そこで「金融資本論」をねた本にして講義してくれたわけです。非常に話もうまかったが、しかし、魅力的だったのは、「永遠の平和のために」、というカントの書名をあげて、平和というのから論じ始めるのですが、本論にはいるとヒルファデングをやった。非常に興味深かったのですが、さてこの方の講義を理解するにはどうしたらいいかと考え、同じ寮にいました同期の占部都美君(故人、神戸大学定年退職後名誉教授)のところへいったわけです。占部君は、貿易科なので、一年のときから園田先生に経済原論を教わっているわけですし、彼もいろいろと徹底する方でしたから、判るだろうと思ったわけです。そこで、園田先生の経済学はちょっと違うのだが、君はどんな風に勉強した、と聞きますと、それは「資本論」だよ、といいます。そこで、それでは一緒に勉強しようかということになったわけです。

それから、経営学に中西寅雄という先生がいました。中西先生が河合事

件で東大をやめられたときに、うちの理事会はそういう人を探してつれてくるのが上手でして、引っ張ってきたわけです。それまでは、商工経営とってました科目を、あの先生がくるので、経営経済学と講義の名称が代わった訳です。あの方は、5月頃から講義にきまして、いきなり「第1章、労働過程」と始まる、そして、労働対象、労働手段、生産力とでてくるでしょう、占部君とそういう話をしたのは4月でしたので、まだ全然見当つかない。そこで、中西先生さんのところへ出かけまして、「わたしは1年間、中山先生に経済原論を教わったが、先生の講義はわからない」といったところ、先生は、「そうだろうな」といって、その当時講義は筆記だったのですが、「僕の著書があるからそれを読みなさい」といわれた。それが、中西寅雄先生の『経営経済学総論』でした。それを読んだら、「資本論」の引用があったので、これは「資本論」を求めねばということになって、古本屋にいて「資本論」を探しても見つからない。それで、日本評論社から全集の一つとしてでていた高島『マルクス経済学』を買って読みましたが、伏せ字が多くてわからない。その古本屋の親父さんが「新しい本に興味を持ってらっしゃるようだ」と、一番最初に机の中から、美濃部達吉の本をみせてくれた。発禁になった『憲法撮要…』です。しかし、僕は「今経済学を勉強しているから、「資本論」をどうしても探して欲しい」といいますと、次に持ってきたのが改造社の経済学全集の『資本論体系』でしたが、それを読んで、やっと少しわかり始めました。そういうものを持ち込んで、占部君と一緒に勉強しているうちに、『資本論』がようやく手に入り、研究会をやりました。ついでながら、そのとき、『資本論体系』の著者紹介欄で、向坂先生が、八女中学出身であることを知ったような次第です。

中西寅雄先生に質問にいて、いろいろ教えてもらったのが、マルクス経済学に入り込んだきっかけでしょうね。

Q：先生の年譜を拝見しまして、中学を卒業されたのが1936年で、あのころの日本の大きな事件といいますと、2・26事件があり、翌年の37年7月に日華事変が起きますね。逆算しますと、40年3月に専門学校を卒業なさっていますから、専門学校におられたのは3年間ですね。そうしますと、入られた年の7月に日華事変が起きておりまして、「資本論」が手にはいるような時期ではなかったのでは…

馬場：そうです、簡単に「資本論」が手にはいる時期ではないですね。ですから、

先ほど言いました『資本論体系』にしましても、表では売っておりませんで、古本屋さんがこの人という人に机の下でチラと見せて売るために、しまっているわけです。

Q：いまで言うとポルノみたいですね。そうすると、今のように本屋さんにならんでいるというわけではないのですね。

馬場：そうです、たまたまです。例えば、白楊社から出た白い表紙の『市場理論』が古本の中に紛れ込んでいるのです。そういう風にして買ったのがレーニンの『市場の理論』マルクスの『強力論』です。たしか、今でもどこかの箱の中にはいっていると思います。

Q：そうしますと、資本論研究会も公然とは…

馬場：そう、寮でやりましたね。しかし、警察が研究会まで押し掛けてくることは、東大だったらあると思いますが、僕らのところはただの生意気な小僧だから気をつけてなかったと思います。

Q：学生たちの間だけで勉強したのですか。

馬場：むしろ占部君が先生みたいに振る舞ってました。私がこちらに赴任した後、たまたま、札幌に講演なんかで来ては、私を呼び出すんですが、「俺が馬場に資本論をおしえてやった」なんて言っていました。

Q：先生は札幌大学にきて、財政再建に大変な力量を発揮されたと聞いていますが、会計学なんかはこの当時は……

馬場：私の当時の成績は、会計学は 100 点とれなかったですが、簿記は 100 点、算盤も 100 点でした。大体、学校の成績からいけば会計関係が一番良かった。中山伊知郎先生の経済原論も 97 点か 96 点でした。しかし、会計学、特に原価計算に関しては、有本邦造という東亜同文書院の教授をやっていた人ですが、僕の友人たちに、馬場君の試験はいつも満点だといってくれたそうです。

もう一つ、横浜専門学校で忘れてはならないのは上原専禄先生です。この方は、経済史と経済政策を担当していました。スミスを徹底的に教えてもらいました。この方のところにもよく行ってまして、いろんな話をしました。「この本読んだかな」といわれたのが、作田荘一の『自然経済と意志経済』という本です。いわゆる、自然経済は商品経済でしょう。彼らから言わせれば、意志経済というのは計画経済にも通じるし全体主義経済にも通じるでしょう。「この本を読んだかね」といわれて、「中身はともあれ、

君達が論文を書くときは役に立つから読みなさい」といわれました。

それから次に読みなさいといわれたのは、宮田喜代蔵の『生活経済学研究』でした。これもなかなか、重厚な書物だったと思いました。これは非常に役に立っています。また、赤松要の『産業統制論』、これは総合弁証法という考えなのですが、これで弁証法が初めてわかりまして、「資本論」を読むときにも役に立ったような気がします。

それから、シュプランガーの『文化哲学の諸問題』これは左右田喜一郎さんが翻訳しました論文集なんですよ。その時に上原専禄先生が、「馬場君、学者というのは書物を何冊も出せば偉いとみんな思うんだけど、この人はこの論文集一冊だけだ。この人は、著書というのは一生に一冊出せばいいと言っていた人だから」といまして、「先生もそうですか」と聞きましたら、「僕もそのつもりでいる」といいました。ところが、先生は、戦後ばたばた書くわけです。もっとも、あれを書き出したのは、罪滅ぼしのために民主主義を植え付けるという、また違った使命感をもって書いたようですが。そういう意味で、上原先生には具体的に教えてもらいました。



馬場 元二 教授

横浜専門学校時代には、教師には恵まれていました。山田勇先生なんかは、非常に勉強家として、われわれがみても学者肌の人で、あこがれたわけです。知らず知らずのうち、自分もああいう風になりたいな、研究生活に入りたいなという感じをもつわけです。だから、今日の素地というのは半分はあそこでできた。

卒業して満鉄にいきますが、どこに就職しようかと考えたときに、久武先生に相談にいったわけです。その時に先生が、「よく考えておきます」と言って下さった。あとで、教室にいるときに呼び出されて教授室に行くと、そこで中山先生と一緒に「きみは、どうも会社勤めは性格的に無理だな」といわれました。また、「研究とっては大げさだが、勉強していればいいところがいいんじゃないか」といわれた。その時、久武先生が言ったのは、「野村証券が将来調査部を大きくするから、そこはどうだ。もう一つは、

三菱経済研究所がある。もう一つが、ちょっと飛び出さねばならないが、満鉄の調査部だ」。いずれも良さそうだと思います。三菱は大財閥だから良さそうだし、満鉄調査部と言えは当時大変な会社ですから。野村証券は知らなかったのです。

そこで、満鉄から就職の案内がきましたから、願書を4月に出しまして、5月に就職試験に行ったわけです。その就職試験のときに、横着な受け答えをしたのです。「きみは満鉄をなぜ志望したか」と聞きますから、「満鉄調査部で勉強したい」と言いました。「きみは、学校の成績表で言えば、何が一番良いかね」と聞くので、「簿記・会計・算盤に関しては、誰にも負けないだけの自信があります。」「そうすると君は、調査部よりも、経理部の方が良いのじゃないか。経理部は満鉄の中核である」と人事部長が言いますから、「いいえ、私は経理部に行くぐらいだったら三井物産でも行ける。しかし、調査部に行けるから満鉄を希望しました」と言ったところ「そうか」と言って、こいつ変わった奴だなと言う顔をしていました。それで、まだ質問があるだろうと思ってたところ、「よろしい」と言うので、帰ってきたのですが、かえってきて、久武先生に、「こういう口頭試験があったが、たぶんダメでしょう」と言いますと、「案外、満鉄はきみみたいなのをほしがっているんじゃないか」と言われました。

Q：伊藤武雄さんの『満鉄に生きて』をみますと、大正時代は旧帝大の人はほとんど入れたが、昭和にはいると入るのは非常に難関だと書いているのですが、そういう意味で、就職は厳しかったのですか。

馬場：そうです、かなり厳しかったです。専門学校からはそう行けない。私の学校から4人受けまして、他の人は鉄道を希望していました。3人合格して、2人が鉄道に入りました。試験に行きますと、東大・一橋・京大が沢山いました。東北大と九大がポツンポツンといるぐらいで、合格者の中にもポツンポツンといるぐらいです。試験に行ったときは、東大の連中と一緒にしました。今からみると、そういう連中と一緒にいたから、こういう勉強ができたし、続けられたと思います。

(3) 満鉄調査部時代

Q：満鉄調査部に入られたわけですが、古い世代になりますと、東京にある東亜経済調査局にはいられて、北京に行ったり上海に行くと言うのが多かったようですが、先生の場合は上海に直接行かれたのですか……

馬場：いいえ、大連に行きました。あそこで、新入社員教育が始まりまして、現業に行く者はすぐ現地、吉林局とかチチハル局とかに行くわけです。そこに派遣されて、



水野 五郎 教授

改札係からはじめて、貨物、旅客助役をやって行く。調査部だけは大連本社に残されて、午前中中国語、ロシア語の教育を受け、午後は各人で最初は図書館や資料室を見学しながら、司書係が満鉄にある資料等について教育するのです。あそこにあるのが「資本論」・レーニン…これは持ち出しちゃいかん、だがここで読むのはいいと…

これを一か月ぐらいやると、今度は調査部の新入社員の希望をとって、グループに分かれて、具島兼三郎はソ連事情、川崎巳三郎は東亜ブロック経済、横川次郎は北支農業事情等々について研究会をやるわけです。講師の名前と研究テーマを見て、希望して入って行きます。私は川崎の東亜ブロック経済論に入ったのですが、そこには木村太郎、小林正一などが同期でいました。

川崎さんのところでは、入ってすぐ課題が出されて、順番に報告しなくちゃいけない。私は、山崎靖純という本職は外国為替論の専門家だっただと思いましたが、その人の「東亜協同体論」を要約して報告し、問題提起をするという役割を負いました。報告では、「いろいろ言っても結局は帝国主義の角隠しだと思う」と言ったところ、若いくせに帝国主義論なんかを口にするもんだから、川崎さんは、おもしろがって質問するわけです。その質問に対応しながら、私のところは済んだのです。

次に木村太郎氏の番になって、日本の資本がなぜに中国大陆に出ざるを

得なかったかを克明に報告した訳です。その時に、資本の輸出ということ
を盛んに言うもんだから、私は「資本の輸出の必然性はどこにあるのか」
と聞いたわけです。レーニンにしても、資本輸出の必然性から問題をはじ
めるが、資本輸出の必然性そのものはちっとも説明しない。せいぜい説明
があるとすれば不均等発展からするだけである。しかし、商品の輸出の必
然性についても不均等から説いている、資本の輸出も不均等発展からでは、
どっちがどっちだかわからないではないかと質問を出した訳です。そうし
たら、木村氏もそれに答えなかった。川崎さんも答えずに、木村君の問題
をもっと深めようとするならば、米騒動からはいっていかないとダメだと
言った。その時に、資本の輸出は農業問題と関連があるのかなと思ったの
です。資本の輸出に関しては、あとで酒をのみながら川崎さんに同じ質問
をくりかえしすると、「きみは軍隊に行くんだってな、今度軍隊からかえっ
てゆっくり勉強したらどうか」と言われました。「市場の理論」なども、当
時の読み方としては非常に浅かったとは思いますが、若さでスピードアッ
プしながら読んでいたと思います。

Q：先生は、当時はレーニンとマルクスのどちらをよく読まれたのですか。

馬場：マルクスですね。満鉄には労働組合の代わりに社員会というのがありまし
て、その機関誌に「協和」という雑誌が出ていました。それに、川崎さん
が新入社員用に恐慌論を書いた。「資本論」第二巻の再生産論から説き起こ
しましてね。

Q：そうしますと、帝国主義戦争みたいな考え方は…

馬場：それが強かったです。事実、中国の蒋介石政権がどれだけの抵抗力をもっ
ているかと言ういわゆる抗戦力調査を軍と協力してやってはいましたが、
大体、帝国主義戦争に対する批判勢力の方が強かった。

Q：後になりますと、中西事件とか満鉄事件とかのように、左翼がパージされ
る時代がきますが、先生の方はまだ自由な雰囲気があったのですか…

馬場：満鉄調査部を勢いよく大きくしようという時ですから、私たちの時に、満
鉄調査部に一番多く新入社員が入った。

Q：先生は日満ブロックの研究と同時に、先生独自に中国民船の研究をやって
おられますが、この報告書は、今はわれわれの手に入らないのですが、ど
ういう研究だったのですか。

馬場：一つは、民船の所有形態の研究で、これは進めて行けば行くほどわからな

い問題です。いわゆる、土着資本というか財閥というか、彼らの資本で運航しており、彼ら自身が実は外国資本に牛耳られているというような事情について調査した。中国民船の調査をやった一つの目的は、どれだけ軍隊にそれを徴発利用できるかという問題にかかっていたわけです。これは実態調査より、中国で書かれたものの翻訳が中心であって、その確認に実態調査をやりました。その後、南船北馬という事情に対応して北支の端、張家口——大同の間で、輸送機関としてのらくだの調査をやりましたが、これは、もうすぐ軍隊に行くのだから遊んでこいというようなものでした。旅費はたくさんもらって行きました。その当時、上海事務所での月給が手当も入れて300円でした。新上海ホテルというところに住み込んで、朝夕食べて月100円ちょっとでしたから、結構な給料でした。満鉄は鉄道会社ですから、鉄道乗車賃は無料ですが、その分も旅費としてもらって行くわけです。出張すれば、会社の出先機関に行くわけなので、向こうのお世話になるのですから、出張すると、金は残って、給料も残ってました。

Q：その時期は、上海のインフレはそれほどでもなかったのですか。

馬場：いいえ、かなりすすんでいました。しかし、後で言われているようなほどではなかった。すすんでたけれども、上海に来た新入社員の連中は、390円ぐらいで、僕たちは専門学校の私立出身でしたから一番安くて300円でした。

Q：そこでホテルに滞在すると月100円ですね。そのころの内地の初任給はいくらぐらいですか。

馬場：大学卒の初任給が80円ぐらいでした。専門学校が70円から75円でした。

Q：上海におられたときは、中西功氏なんかは一緒におられたのですか。

馬場：中西功さんネ。あのときの私の本俸が70円でしたが、彼の人は69円でした。というのは、学歴ですね。彼の人は東亜同文書院中退でしたから、職員として採用されなかった。伊藤武雄さんが彼を抜てきして職員にしたわけです。ところが、専門学校出身でないので70円にならないのです。その当時、上海には、中西功、農業調査で有名な内ヶ崎虔三郎。それから、西雅雄。北星学園大学の統計学をやっておられる高岡英夫さん——高岡熊男先生の息子さんですが、この人がいました。高木幸二郎先生、それに名古屋経済大学の、私と一番仲の良かった中島邦蔵先生もいました。佐世保にある、国際経済大学の学長をやった逸見顕善先生も上海にいました。

Q：この当時は、マルクス主義的潮流と軍事ファシズム的な潮流の、研究所内での対立はあったのですか。

馬場：この当時はまだなかったです。アカ刈りが始まってから揺れ動いてきたと思います。

(4) 軍隊時代、補給部

Q：先生の軍隊時代のお話で、1941年の4月に現役兵として入隊なさっていますが、どういうところにはいられて、どのようなことをなさってきたのですか。

馬場：私の軍隊生活と言うと、徴兵検査から始まります。満鉄に入りまして、大連で徴兵検査を受けました。当時は、調査部に入った連中と一緒に、徴兵検査に不合格になる方法をいろいろ考えました。心臓をやられたらいい、そのためには醤油をのんだらいいというので、真剣に醤油を飲んだんです。そこで、木村太郎氏が私より一日検査が先でした。それで、「頑張ってこい」と言って送ったんですが、夕方青い顔をして帰ってきました、「合格しちゃったよ」と言いました。私は醤油じゃなくて下剤をのんで行ったんですが、これも見事に合格しました。

入隊したのは、郷里の久留米でした。当時は48部隊といました。そこで初年兵教育を受け、そのあいだに幹部候補生試験がありました。これは当時は強制的なもので、二回に分けて行われました。私の場合は、兵科幹部候補生、経理部幹部候補生の二回の検査を受けました。それで幹部候補生に採用されて、そのよく翌日から最初の検閲演習を受けて、「ご苦労だった」と私だけ外出を許可され、親のところに行って、酒でものんで、一日泊まって帰ってきました。

その後は、兵科関係の訓練も受けるわけですが、半分は師団の経理部に行って研修を受けました。そこでは、こういう戦況になったときには何を兵隊に食べさせるかとかいうような演習ばかりやっていました。そして、陸軍経理学校にいきました。

Q：それからの配属は…

馬場：私は、陸軍兵器行政本部付きになりました。工場監督、工場の会計監督をやりまして、平壤へ行きました。そこで終戦までいたのです。仕事は、演

習をやるわけではなく、毎日工場へ行って見ていけばいいわけです。

Q：当時の平壤の工場といいますとどんな…

馬場：一つには、相当大仕掛けでしたが、大砲や鉄砲の弾丸を満州などの戦地へ送り込むわけです。それを箱つめするのですが、その箱を作らなくてははいけません。これは湿気が入ってはいけませんので、木材をパラフィンで煮つめるわけです。そして、それでもまだ湿りますので、アスファルト紙で包むのですが、それを作る工場を監督していました。

Q：平壤へ行かれたのは、すぐだったのでしょうか。

馬場：はい、陸軍経理学校幹候隊を卒業してその年の11月にすぐです。行政本部付きの場合は、久留米師団の兵器部にいました。それから、平壤に行きました。敗戦になったとき、京城（ソウル）にある朝鮮軍司令部の、参謀部に出張しろといわれました。その出張を命ぜられた目的は、結局、もうソビエトが北鮮に入ってくるところでことがはっきりしていたので、全部兵器を没収されるが、そのときの要領がよくわからないので聞いてこい、というものでした。そこで、参謀部に行って、これこれしかじかの理由で来ましたといい、話を聞いて、「帰ります」というと、「ちょっと馬場、待て」というのです。「もうおまえ帰れないぞ、昨日のうちにソ連軍が38度線まできている」と言うんです。「おまえはここですぐ軍服を脱いで、もうすぐ日本人の内地送還が始まるから、釜山まで全部送って——輸送指揮官です——みんな送ったことを確認して、最後におまえも帰れ」といわれました。それで、軍服を脱ぎまして、退職金をちゃんもらって、京城の近くにあった平壤補給廠の傘下部隊をアメリカ軍に接收させて、私は軍司令部に行きその指示で仁川というところに行って待機し釜山に行く、帰ってきてはまた釜山に行くを繰り返したあと、やっと終戦の年の10月11日に博多に戻ってきました。そんな次第で、私の同僚はみんなソビエトに行っていて、3年くらいしてから帰ってきました。

Q：たまたま出張で、ソ連の進駐がもう少し遅かったら、逆に平壤に帰られてソビエトに捕まっていた訳ですね。ちょっと遡りますが、平壤にいらしたときに、古本屋で資本論を……

馬場：私は軍人ではあるけれども、別に戦闘をしてるわけでもなく、ちゃんと陸軍官舎を一つもらっている。だから、本はいくらでも読めたわけです。それで、当時「資本論」を——日本語訳でしたが、朝鮮人の古本屋の奥で見

つけて買ったのです。安い値段でした。それを読んでいました。それから、伊藤武雄所長に外国語をやっておくと入隊するときに言われましたので、『ピースアンドウォー』という本を買ってきて、読んでました。それから、その当時、岡崎次郎訳のゾンバルトの『近代資本主義』が出版されましたが、その時は予約しなくては買えなかったのですが、買ってむさぼるように読みました。それから、豊崎稔の『機械工業論』も読みました。でも、「資本論」を一番読んだと思います。

Q：すでに専門学校時代に経済学を学んでおられ、それが軍隊にはいられて、戦時中も同世代の方よりは余裕があったということになりますが、当時の先行きをどう考えておられたかをうかがってみたいのですが。

馬場：実は、私と一緒に技術将校で、Mという人がいました。この人が技術関係でアメリカと日本の比較を、やりながら、よく一緒に酒をのんで、「不謹慎だが、大変だ」といっていました。私の経験では、大砲の弾丸はできている。しかし、これを大砲につめるための紙の筒がいる。これが今までは、内地からきていたのに、それがこなくなったんです。現地で調達しなくてはならない。それに非常に苦勞しました。みんな揃っているのに、それだけがないので弾丸を送れない。火薬はいっぱいあるが、それをつめる火薬筒がない。みんな私たちが悪いということになる。そのことで上官といさかひがありました。私はそういう困難はうまく切り抜けた方で、無茶な怒られ方はしませんでした。戦争には負けた方がいいと思ってました。のんびりと「資本論」を読んでいた訳ではないのですね。

Q：兵隊の位は最後は何だったんですか。

馬場：戦争中は中尉でして、戦争が終わったときには大尉ということになったので、私は大尉です。終戦後になりましたので、軍服は大尉の肩章を着けていませんでした。給料も大尉でもらっていません。退職金は大尉でもらいましたが…

(5) 九州大学時代

Q：戦争から帰ってきました、九大に行くまでのお話をお聞きしたいのですが。

馬場：戦争から帰ってきました、どこかで飯を食わないといかん。今の福岡県商工会議所——戦時中は商工経済会といっていました——そこで職員が

足りないという話があり、たまたま福岡の本部に私の親戚がいて、誘ってくれました。「商工」という文字がつくだけ、経済になじみがあるのではないかと思って入りました。入りましたら、北九州の支部へ行きました。行くなりすぐ総務課長です。一年間ぐらいそういう雑用をやってました。それが、「商工会議所」に変わるということで、魅力がなくなりまして、辞めたわけです。その時、私の本家に、私のでた中学の国語の先生を定年でやめ八女津女子高等学校というところで教頭をやっている人が来て、「うちで働いてみないか」といいますので、勤めることにしました。担当は社会科、商業科、英語を教えました。英語のテキストがないもので、アメリカから来た会話の教科書を使い、みんなに買わせるわけにもいかないので、ガリ版を切って渡していました。

Q：これは1年間やってたのですね。

馬場：その間に弁論部の部長をやりました。西日本新聞社が後援についた大会に女子学生を福岡までつれて行って弁論をやらせ、勝たせて、新聞に載りましたよ。男の生徒を負かすわけです、睨みつけてね。「制服は是か否か」というのをやるんです。その場でくじ引きで是非の立場を決めて、すぐ、しゃべるのですから、是・非両方の意見を頭にいれておいて、両方の模擬答案を作って、やらせるわけです。当時は、また、福岡県教職員組合の青年部長もやらされていました。

Q：九大にはいられた動機は何でしょう。

馬場：八女津にいるときに、川口武彦君がリュックサックを背負ってひょっこりやってきたわけです。私はちょうどその時、生徒にバレーを指導していました。

Q：川口さんとは…

馬場：彼は、八女中の同級生で、松山高商から九大に行っている。そして、満州興業銀行か中央銀行に就職して、あとは定まりのコース軍隊、そして、敗戦帰国し、田中定先生の所へ行って、特研究生になった訳です。その当時は、米がない。八女に米の買い出しにきて、私を訪ねてきたわけです。そこで、家に一泊したときに、たまたま満鉄調査部の話をした。その時「資本論」の話をした。もっていた「資本論」は日本に帰ってきたときに、長崎でとられてしまいましたが、さっき言ったように兄貴の本が家にありましたから、それを引っ張り出してきて、ここん所がわかんなくてねというような

話をはじめたわけです。そのとき上海で買って読みかけていたリヤシチェンコの『農業経済学』、ヴァルガの農業経済の本やチャヤノフの『小農経済の原理』を持っていたので、彼に見せたのです。そのときの話は川口君が田中定先生に話したようです。田中先生は、「九大で勉強して残るようにしたらいいのではないか」と川口君に言ったそうです。そのあと大内力氏や田中先生が、朝日新聞の講演で農村を巡回していたときに、会いに行きました。講演が終わったら、温和に、にこにこ笑いかけてくれまして、「九大へいらっしゃい」と勧められたのです。

九大に行く決心をしたのですが、入学試験科目がなんなのかがわからない。年によってちがっているのです。大体外国語・哲学・国語・経済学がある。経済学はあると思うから、前の年の経済学の問題を見たら、「価値・価格・インフレーションについて述べよ」、森耕二郎先生が出題している。こんな問題がでてくるのならと、その当時、河上肇の『史的発展』が新しくでていたのですが、それを一生懸命読んだ。それと、『経済学大綱』を買って読む。スミスの「国富論」は、川口君の好意でモダンライブラリーを読んだ。当時は、夜は電気はすぐ消してしまうので、石油ランプの火ですすだらけになって読んだものです。今みたいに、あんな問題があるなどということはわかりませんでした。スミスを一生涯懸命読みましたね。ところが、経済学の試験がなく、哲学と国語と英語の試験でした。大丈夫だろうとは思ってましたが、発表の前日に川口君から電報がありまして、「合格おめでとう」とある。入学式のあと田中先生の所へ挨拶に言ったら、「九大に残るように頑張りなさいよ」と言われて、もうその気になってしまって、……。おしむらくは田中先生が学生部長をされて一番忙しいときで、講義もゼミも休講でした。ですから、あまり田中先生には教育を受けていない。いま大学の教授でいる大屋祐雪、中谷哲郎、北古賀勝幸、内川菊義の諸兄が同期です。卒業レポートでは、農村調査表に基づいて柑橘類の分析を行いました。これは、田中先生は評価してくれましたので、私は残れるんじゃないかなと思ったりしました。しかし、都留大治郎助教授が兵隊から帰って見えたので、私が入り込むところがなかった訳です。それで、田中先生もずいぶん困っていたようですが、川口君にどっかいいところがあったらというような相談があって久留米大学に急きょ話があったということでしょうね。

Q：学生時代の勉強は、どんなことを中心になさったのですか。

馬場：農業関係を勉強しようとしたのは、帝国主義論の資本輸出との関係ではじめました。田中先生にすすめられて大学にはいった。農業問題やるひとたちはすぐ地代論をやりますね。

2年の時に向坂先生のゼミでリカードをやった。そこで、自分で報告したいところを届け出るわけです。私は地代論を担当したのです。幸いに、向坂先生のゼミはなかなかすすまないのです。第2章の地代論にたどりつくまで夏休みまでかかったので、幸いに「剰余価値学説史」が読めました。そのときのリカード研究で描いたイメージが、最近書いた農産物価格論に役立っている。ゼミで、向坂先生に、「どうして最劣等地の農産物の価値が価値を規定するのか」と質問したが、先生は答えなかった。ずっと後になってのことですが、私の最近書いた農産物価格論について、向坂先生がなくなる前に行って話をしたことがあります。向坂先生は、「土地の制限性があるからな…」というので、「土地の有限性は価値の成立に関係ない、それは生産価格の問題だ」といったような意見を申し上げたのです。先生は「早く書き給え」と言ってくれました。

Q：当時の大学の雰囲気と、資本主義論争をどのようにみていたかをお話下さい。

馬場：僕は、どちらかといえば資本主義論争には興味がなかったですね。ただ、向坂先生が東北を題材にして、資本主義は芽生えているじゃないか、とっているのですが、あれは若干問題ではないかと思ったりしたことがあります。

Q：田中先生は、地代論論争よりは、実証的に自小作前進とかを明らかにした方で、実証研究の伝統がありますね。先生も柑橘類の研究などもやっておられて、論争よりはむしろ実証で明らかにするという雰囲気が強かったのでしょうか。

馬場：ええ、そうですね。だから、田中先生の自小作前進だけでなく、作物表の分析を通じて、米をどう位置づけるかということで、自小作前進を裏付けるものであったと思います。

私が調査をやらされたというのは、満鉄調査部にいたので計数処理、統計整理の点でこれは調査で使える、と考えられていたんだと思う。

Q：森耕二郎先生とのお付き合いは…

馬場：それが余りないのですよ、ただねそれがどうしてですか、私をずいぶん可愛がってくれまして。よく特研生助手が集まって酒飲み会をやるわけです。私がノンベイだからなのか年よりだからなのかわかりませんが、私が幹事役をよくやるわけです。すると森先生のところへまず最初に行って「これこれこうで簡単な懇親会をやりますから、先生よろしく願います」というわけです。「あした教授会だからな、5時になったら教授会がやっても入ってきて合図をせよ。」と云われました。最初行かなかったのですよ、いくら何でも教授会の最中にいけないわけですよ。そしたらあとで「お前ちっとも約束まもらんじゃないか、俺は今か今かと待っていたのに。」

それからあの先生には名著があるんですよ。『リカード価値論の研究』です。これは『労賃学説の史的研究』と並んで名著だと思いますけど、それを向坂先生からお借りして読ませてもらったあと若干の質問をしたりしました。

Q：それで向坂先生との出会いをお話ししてもらいたいのですが。

馬場：向坂先生が九大に復帰するにあたって先生の世話をする人が必要だということになり、田中先生のもとで特研生であった川口君が、自然に向坂先生のところへ入っていくことになったようです。あるとき、向坂先生が見えたところにちょうど僕が一人いたのですが、かしこまって自己紹介することもできずにいると「君が川口君の言っていた馬場君か」と言うことでお会いしたわけです。そのうちに、向坂ゼミが始まると、そうとう活発な討論をみんながはじめるし、向坂先生を囲んだ資本論研究会に出席したりしているうちにいつのまにか親しくさせて頂いたということです。

僕が特研生やっていた時に「リカード全集」がイギリスから出て、それを向坂先生が買っていて「馬場君これを読んだらいいだろう。忘れないように帰してくださいよ」といって貸してくれました。忘れずにお返ししましたけれど、ゼミでリカードを読んでいたものだからもう一遍読んでみたら、ということで貸してくれたんだと思います。

向坂先生との思い出は一杯あるのですが…八幡製作所には同志会というのがあって、向坂先生に研究会をやらしてもらえないかと申し入れてきた。それで馬場が行ったらどうかということになって派遣されたのですが、先生も月一回は出席されました。そして研究会が終わるといっしょに博多まで国鉄で帰るのですが、途中の折尾というところで有名なかしわ飯とその

他にお茶など好きなものを買って食べながら帰るといったことがありました。

Q：向坂先生御自身も馬場先生が特研究生になった頃から実践的な活動をするようになったのですか。

馬場：実は特研究生を私が終える直前に社会主義協会が発足し、社会主義協会の九州総局がおかれたんです。その時に川口君に「馬場君も是非入れなさい」と言われたらしいのです。だから一番最初の名簿に私が載っているのですよ。馬場君を是非入れなさいと言った理由は「価値と市場価値」、「社会的必要労働時間」について先生に報告して教えて頂いた時の印象がよかったからではないかと思います。

経済学原理について

Q：処女論文「価値と市場価値」についてお聞きしたいのですが、当時、横山正彦氏の見解は学界の主流だったのですか。

馬場：ええ主流ですね。ローゼンベルグの説に乗っていたから。遊部久蔵氏もそうだし、だいたいマルクス経済学をやっていた人の多くはそうでしたね。

Q：当時の学界主流にたいして先生が提起された価値論批判を、現在、どのように評価されていますか。

馬場：私の当時の考えは今ほどはっきりと、「どういう状態の下でも自然法則にもとづく価値法則が成立する」というほどの理論は持っていなかった。漫然と「資本論」等、とくに物神性、疎外論、そして、貨幣論の価値尺度、流通手段のところをみたりしているうちに、どういうときでも価値法則が成立する基盤があるという理解に達したのです。だからその次に書いた「市場価値から市場価格の乖離」では敢てそのように主張しているところがあるのですが、それをどうみんなにわかって貰えるように展開すればよいか、ずいぶん頭を悩ましたものです。

その後、市邨学園に行って古在由重先生と一緒に仕事をする事になり、一度、次のことについてご意見を伺ったことがあった。それは、社会とい



元田 厚元 教授

うのは経済的基礎構造が出来て、そのうえに経済的諸過程が形成され、さらにそのうえに実際の社会形態が出来てくるとそういうふうに考えないといけないのでないか、その際経済的基礎構造というのが価値法則が成立する基盤になっている、……とこういうことを述べて、意見を聞いたこともあったのです。しかし、そのときちんとした、答えを貰ったというわけではないですが。

ともあれ、私の現在の考え方の出発点は、あの最初の論文にあったわけです。そして私が考えている全体としての課題は、そのあと『経営セミナー』に書いた簡単な雑文に述べたことなのです。

Q：その後、この論文では自然法則という言葉は使われていませんが、「市場価格の背後にある市場価値…」と書いていますから、価値法則、その前にある自然法則という考えは当時からある程度考えていたということですか。

馬場：考えていました。『経営セミナー』には価値法則は自然法則に添わなければならないと書きました。自然法則としては諸々の使用価値相互間に質的構成と同時に量的構成においても比例均衡関係がなければならないが、そのためにはそれに対応して労働配分が均衡を得ていなければならない、ということにまではその当時すでにわかっていたのです。しかし、諸商品の価値が社会的労働時間によって決まるということを自然法則からどう論証していったらいいか、そのひっくりかえるところがなかなか説明出来なかった。だから両極端の一方の側に使用価値の比例均衡関係、他方の側に労働の比例均衡関係をおいて、実際にこの世の中でおこなわれる交換というのは使用価値の側の比例均衡関係だと言うところまでいけなかったわけです。もちろん今でも——価値法則と自然法則の関係について書いてはいますが——まだ論証そのものにはなっていない。いまようやく、諸使用価値の量的比例均衡関係があってはじめてすべての商品について交換が成立しうるし、そういう事情のもとで成立するところの交換関係というのは需給関係が均衡を得ているもの相互の交換関係である。ここに成立する交換価値が、ほかならぬ価値だ。そういう交換価値が成立する時には双方の商品に等量の労働が含まれているということが論証出来るんじゃないか……と、そういうところへようやく思いついたところでした。

Q：先生が価値論を構想された背後にある資本主義認識という点についてお聞きしたいとおもいます。ある意味で経済原則的な均衡の世界にたいして資

本主義というシステムは不均衡なものを条件に存在する、このように先生のお考えを理解しておりますが、そういったしますと総体としての資本主義というものをどのように観ておられるのか、という点が1つです。もう1つは、価値論に関わらせて現代の資本主義の動態というものをどのように観ておられるかという点です。

馬場：資本主義というのは自由競争で生産価格を成立させる。成立させるというのもおかしいものですが、生産価格という方向を取りながら価格はできあがっていく。その価格は価値から乖離したものであって、自然法則的の均衡から偏倚した不均衡を条件として成立している。だから価値法則をもって資本主義はいつまでも存続するとは考えられない。早い話が恐慌がやってくる。今、『資本論』第2巻を播いて恐慌がやってくる過程を論証しているかと思っているんですが。自然法則に逆らっているのが資本主義だ。それに、現代の問題はその自然法則と現実とのギャップがますます深化しているがゆえに惹き起こされたものである、と私は考えている。そうである限りは資本主義は死滅する、倒れてしまう。資本主義をもって生まれた運命だと思っている。しかしそれでも資本主義が今日まで生きつづけているのは、このギャップをいろんな機構を通じて支えていくことがあるからだと思っています。このことへの理解なしには、現代の経済政策の正しい認識は得られないんじゃないかと思っています。

Q：そのギャップを埋めるということですか…？

馬場：埋めるのじゃないですね。埋まらないですね、絶対。表面を糊塗していくんですね、矛盾を外に出さないで。ずっと押し込んでいくわけですね。その押し込まれたものはやがて出てくるものなのです。というのは自由競争がおこなわれている資本主義でもそういうギャップがあるわけですが、その矛盾を外に出ないように押し込んでいくわけですね。信用による展開なんかがそのさいたる問題でしょう。

Q：矛盾にその展開形態を与える、ということでしょうか。

馬場：矛盾を押し込んでいきながらもやはり恐慌が起きたわけですね。ほぼ10年に1回、それは結局押し込んでいっても成功しなかったということです。今日のようにそのギャップを支える機構が非常に堅牢なものになったとしてもそれはいつかは無力なものになってしまう。この押し込まれている間は恐慌は現われてこない、それは慢性的不況的なものでそれがごまかされ

ていく。しかし何時か必ずそれは爆発せざるをえなくなっていくというふうに考えている。

Q：不均衡を条件に生産価格が成立するといえますと、経済構造からはみ出しているこの反自然的な反社会的なものの押し込めは、日常的な経済政策で行なわれていると理解したらよいのでしょうか。

馬場：僕は政策だと思います。経済原論というものはね、どこの大学でも原論だけで終わっている。原論のなかから政策論が出て来る必然性が出てこないんですね。僕は、これでは経済原論というか、経済学原理というにはほど遠いと思う、政策を必然化させているものは何か、ということを経済原論は出さなければならない、と私は考えている。

Q：これはストレートな形でお答え頂かなくても結構なのですが、それでは政策と言いますとよく言われているような自由主義段階とか、帝国主義段階とか、大きな資本主義の歴史性というものを先生はどう考えておられますか。

馬場：思い付きの発言と思って聞いてもらってもいいのですが、直接的な生産物交換ではなくて貨幣が介在しますよね、購買に。自由競争段階においては過剰部分と不足分がある、過剰にたいする需要を何で賄うか、『資本論』第2巻でわざわざ早々と説いている固定資本の運動ですね。固定資本の償却基金というのは個別資本家の許に蓄積されていく。それがそういった穴埋めに役だっている。それがだんだん金融機関に集積される。金融機関を介することによってその穴埋めを支える機構そのものが質的に変化してきている。資本主義は、その成立当初より、現代資本主義のもとで益々顕著となりつつある経済的諸現象の要因をもち、その矛盾を円形運動のなかで処理していく能力を有していたと言ってしまう。したがって資本主義の歴史的発展段階に応じて、質的に相異なる政策が生まれてくるとは考えない。矛盾の拡大深化に伴って個別資本の力によるものから総資本の力によるものへと、その対応策が変化してくる。そういうところじゃないかなと思っています。

Q：資本がそういう均衡からはみ出した不均衡なものを政策的にカバーすると致しますと、自由競争段階と独占段階の違いをどこに求めたら良いのか。資本主義がカバーする構造的なものが質的に転化したのが独占段階だということになりますか。

馬場：独占資本主義というのだけど、独占が生産部面のうちもっとも基礎的な生産を押さえてしまう、それを独占資本主義とっていいだろう。次に独占資本主義がどのような供給をおこなうか、それによって形成される資本主義の構造がゆがめられていく。ゆがめられればゆがめられるほど構造的に支えは作り出さなければならない。その支えは独占段階にきたから突然、作り出すというのではなく、徐々に自由主義段階に作られてきたものが質的に変化する、高度化する、そういうことじゃないかと思われるのです。

Q：資本による不均衡なもののカヴァーという問題は、独占段階における生産調整という側面ではイメージし易いのですが、その場合も市場が問題になります。自由競争段階の政策というとき、市場問題、世界市場との問題が入って来ることになりませんか。

馬場：僕は自由主義段階の場合、協定みたいなものはないと思う。協定みたいなものが出てきた場合は今日の独占資本主義に近づいてきていると。それから、資本家的均衡と自然法則的均衡のギャップは、市場に現われるものであって、そのギャップが、自由段階と独占段階では、後者においては、より大きくなるものと考えられるので、市場問題そのものも一層、拡大深化されるものと考えています。この点については、価値法則が成立する基盤の外廷的拡大と、そのために生ずる複数の基盤の接触と重なり合いの問題があるのではないかと、思っています。米の自由化の問題、米価の問題もこの点を別にしては解決できないのでは……。

Q：そうしますと個別資本の行動の中で解決していくということになりますか…。

馬場：最初はそうだと思います。しかし個別資本の行動には限界がある。社会的総資本の行動によって解決しなければならなくなる。価値法則の成立基盤が自由に外廷的に拡大しうる間は、そういう総資本の自主的行動で解決できると思うが、この成立基盤が、接触、重なり合いをもつようになればもはや自主的行動そのものの限界が現われる。

Q：ちょっと話を戻しますが、先生は、よく九大時代にやられた経済学批判の研究会は大いに勉強になったと言われておられますが、その話を一つして下さい。

馬場：そうそう、あれはね、経済学批判の序文のなかに「あらかじめ書いた一般的序説」というところがある。それで昭和27年頃、僕があれを読もうでは

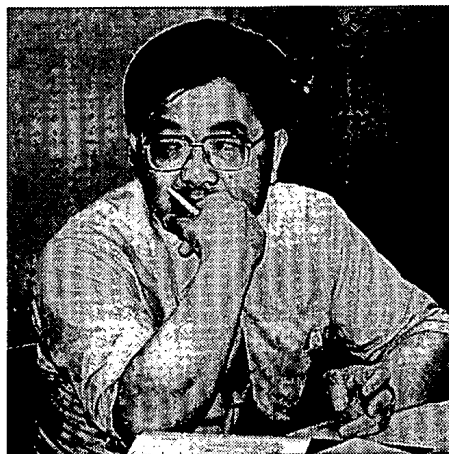
ないか、と言って賛同をもとめたんです。そのときに来た人の中で、今大学にいる人では、九大の名誉教授で経済史をやっている湯村武人氏、松井安信氏、中村健治氏、平田喜久雄氏、九大を定年になって熊本商科大学にいる小島恒久氏、深町郁彌氏と中村広治氏、そういった人々が拙宅の8畳と4畳半にたむろして序説を読んだのです。これは、非常に役だったと思います。特に生産と消費、交換、分配の関係を説いているところで、「生産とは」と説いた後で「生産とは生産をする人のためにする生産、だから社会的生産とは社会を形成する人のための生産」というくだりがある。ということは誰かが消費しないかも知れない生産は社会的生産ではない。そういう生産物を前提にしない消費もありえないし、そういう生産物を前提にしない生産も交換も分配もありえない。そういう考え方がそこから出てきた。私が、使用価値と言えは社会的価値についてつねに強調するようになったのは、あの序説と一緒に読んでからです。

Q：先生はよく価格が実際にどうやってつけられるのか、について、マーケットの話がされますが…。

馬場：それは価格というのは生産者がいくらいくらと決めることが出来ない、それは社会的に規定されている。これはいつも、元田先生が僕に質問するのですが、しかし、規定される場合に最初に出てくる価格がある——相互に交換し合うとする。相互に必要なとする量は、この市場において比例均衡体系をなすわけです。これは自然必然性をもって成立するこの体系のなかで決まる交換比率がそれである——だからその最初の価格というのは価値が価格という形態をとって出てきたものである。これがないと生産者が集まって競争する運動が起こされない。つまり、現実の価格というものは自然必然的体系のなかで自然法則的に定まる価値にもとづいて、彼らの生産物をすべて売り捌こうとする生産者たちの社会的な力の均衡によって落ちついた数量的な交換比率でしょう。だから価格というものは生産者がつけるものではない。

Q：馬場先生の価値論といいますか、自然法則という言い方は最初から一貫しておられる。最初は「経済評論」の論文なんだと思うのですが、先生は、一方ではスターリン批判、最大限利潤論批判をされ、他方では小農価格論、「C+V」批判をやられた。その過程で政治的ないろんな制限とか独占によって説明したり、あるいは小農経済というものを、「C+V」、小農だか

ら価格を低められるというように、政治的なとか、環境的なとか、をもち出して説明する学説を批判されてきた。これらに対して先生は、社会的必要労働、社会的価値という概念をきちんとすることによって、社会化されない使用価値といいますか、どういう表現か忘れましたが、それが市場に出て低められる、そういう意味では非常にわかりやすい。小農とか政治とかを価値法則の中でどう位置づけるか、ということを読まれることによって馬場先生の価値論が現在に貫かれる赤い糸で出来上がったのでは、と素人的な感想なのですが、そう理解していいですか。



岩崎 徹 教授

馬場：「小農経済における農産物価格形成に関する考察」というずいぶん長たらしい標題のものは、九州経済学会で報告したのですが、これを取り上げた理由は花田仁伍氏の農産物価格論の誤りを一度批判しておかないといけないということと、もう一つ、大内力さんがかつて『農業問題』（岩波全書）という本を出したのですが、これを批判しないといけないということだったので。そこで私の言いたかったのは、日本において米価は安すぎる、しかし、外国の米価に比べると高すぎる、その本当は安いものが現実には高く出てくるのはどうしてかということです。この問題については前の半分くらいは言っていますが、まだ全面的に解決していません。これから生きていけばやる機会があると思いますが、さきほど市場問題についてのご質問で答えた方向で推考してみたいと思います。…

Q：農業経済論では今もあいかわらず小農の農産物価格を「C+V」で解いておりますから、そういう意味では農産物価格論でも、馬場先生の論文はもっと評価されてもいいと思うのですが。

馬場：これについては、この論文を当時大阪市立大学にいました狭間源三氏に送りましたところ、実に好意的な感想文を書いてくれました。

(6) 久留米大学その他

Q: さて、九大の特研究生を終えられてから札幌大学に来られるまで10数年ですね、久留米大学、市邨学園短期大学、九州共立大学と3つの大学を経られています、その間の経過というか…

馬場: これもなかなかおもしろいで、久留米大学にいたときにですね、教員の資格を決めるのは全部文部省だったんですよ。資格審査委員会というのがあって、私の時にはT. T. という人が委員長でいて



萬谷 迪 教授

ね、久留米大学からは申請書を毎年出すのですが、私には「経済原論講師」の判定すら下りないのです。それで松田緞氏が「馬場君はなぜ資格を取れないんですか」ときいたそうです。「彼みたいに同じことばかりやっている者には資格はやれない。俺の目の黒いうちは絶対やらない。」っていったそうです。松田君も「君、同じことばかりやっても仕方ないだろう、資格ができないだろう」って酒飲みながら僕に文句言うわけです。「学者は一生のうち一つ仕事をすればよい。いまのいき方を変えようとも思わないし、ましてや、この大事な仕事を変えるわけにはいかぬ」と言ったら、松田君は、「それならそうでもいいんだけど」…そういうことがあったんです。

そのうちにですね、旧帝国大学の経済学部長もやったことがあるS. Mという先生が、学部長に就任したのですが、東京からリモートコントロールをはじめたのです。一度、経済学史学会でイギリスの経済学史をやっているミックが来日したときに松田君と二人でうちの大学で講演やらせようと、経済学史学会へ申し込んだんですね。申し込んでね、金が必要だったので学部長先生に連絡を取ったら、まかりならんとなったんですね。それで連名で「あなたは東京の大学には相応しいが久留米大学にはふさわしくない、即刻辞めていただきたい」。それで先生は辞められたわけです。こちらは辞めさせた張本人ですから、我々もそろそろここをおさらばしたほうがいいんじゃないかなということになった。だいぶとめる人もおったので

すが、辞めるときになって行く先をそろそろ決めておかなければならないということで友人達と連絡をとっておりましたところ、当時富山大学教授の内田譲吉先生から速達が来て、「今、名古屋に市邨学園短期大学をつくるが、いずれ4年制大学にするからは是非君たちにやって欲しい」とのことで、この話にのることにした。それで履歴書をつくって、文部省に申し込んだわけですね、そしたら、そのときはもう審査委員長は別の方になってましたが、そこで「経済原論のほかに経済学の教授の資格を得、翌年さらに、家庭経済学の教授の資格を得ました。そういうことがありました、今から考えてみるといつまでも資格をとらずに大学の教員をよくぞやっていたと思いますかね。

Q：久留米大時代の教え子さんは今…

馬場：何人もいますけど、その中で3人が大学の教授になりましたね。学生時代3人ともそろって日曜のたびに資本論の研究会をやった仲間なんです。一番最初卒業したのは現在久留米大学の商学部の教授で江口傳君で賃金の実態調査をやっていますね。私のゼミで「資本論」の1巻を英文で、また松田さんのゼミではドイツ語でやっていた、これは卒業するまでやっていたね、3人とも九大へ入りました。最初の年には江口君に受けさせた、そしたら発表が終わって向坂先生に「江口傳と言うのがうちのゼミから受けたんですが」っていったら、「あれはもう一度受けさせなさい」というので、「先生もう一回入学試験があるんですか」、ときいたら、「来年さ」それで、「先生、見込があるんですか」、「見込はある。語学も出きるし…」。向坂先生は自然法則と経済法則という試験問題をだしたんですね、私は労働配分の法則の話を書いたわけですが、彼はそれを書いていたわけで、向坂先生は非常に気に入っていたのです。それで彼のおやじを説得して、一年間私のゼミへ出て、それで翌年合格しました。その翌年は藤田暁男と山中豊国の両君が受験しました。今、藤田君は金沢大学の経済学部長をやっているし、山中君は福岡大学商学部の教授をやっています。この2人が合格した時は、いくつもの大学から九大の大学院へ20数名の受験者がいたが、4名だけ合格した。そのうちわけは、九大から2名合格して私のところから2名合格した。そしたら馬場克三先生が「馬場元二君はどえらいことをやってくれたな」と言って下さったことがありました。

Q：先生、68年に創立2年目の札大に来られるのですが、そのいきさつは……

馬場：当時、九州共立大学に工学部をつくることになったが、工学部をつくるには既存の学部を充実させる必要が生じたわけです。それで経済原論の専任の教授をおかなければならなくなり、人を介して、私に強い要請がありました。私は九州の出身でもあるからということで市邨学園の方をお願いをして、ようやくこの大学に赴任し、工学部も設立許可となりました。ところがここが大変な理事長ワンマンの大学で、松田君も一緒に東京からきました。それは大変な理事長でした。(後の話ですが、理事長を変えなければ補助金を出さないという文部省の指導でそれを変えてからは、いい教授を集めてきちんとやっています。)そういうところへ麻生平八郎先生がお出でになり、北九州のカッポウ旅館で飲んでいたところへJ. U. 先生から電話がかかってきて、「今、大阪に一つ大学をつくる。そこで馬場君、手伝ってくれないか」ということでした。ところが、実は麻生先生も「僕も札幌に札幌大学というのをつくっているが、経済原論をやるのがだれもない」というのです。その当時は、札幌といえば、熊が出る場所、というぐらいの感じでしたし、長男坊が生まれたばかりだったりで迷いましたが、その時の約束では5年間位は役職は一切やらなくてもよいということだったんです。しかし、実際は半年後だったのです、学生部長をやったのは。

それからが大変でした。理事、理事長代理となって、大学の建て直しを巡って、奔走せざるをえなかったのですから……全部やり直したわけですからね。

(7) 札幌大学資本論研究会

Q：馬場先生はその後2回学長をやられることになったわけです。1回目は75年から79年まででしたが、そのときは、学長を辞められた翌日から研究室にこもって勉強を再開されましたね。札大に来てからの勉強ですすんだ点は何でしたか。

馬場：本質的に変化したことはなかったですね。理事や学長の仕事が忙しくて、まとめられなかったのです。

Q：札幌大学での資本論研究会のお話をおききたいのですが、札幌大学にマルクス経済学を専攻する先生方が増えてきたということで、先生が声をかけて'74年に始めたのですね。いろんな先生に当たって研究会を始めたの

です。馬場先生が冒頭商品論の報告をやって、5回位は続いたのですが、…それだけで潰れてしまった。

馬場：そのころ僕は理事長代理で、しょっちゅう東京へいっていたので、研究会なんかで討論などもできなかった。それで結局、潰れてしまったんですね。

Q：その後再開したのは、先生が学長を辞められた年、……辞められるちょっと前ですかね、79年に小島、平尾両先生でヒルファディングを読もうかと企画したのですが、ヒルファディングより前に「資本論」3巻を読まなければならないことになって、小島先生が幹事となって、読み始めたのです。馬場先生が学長を辞められて、毎回、出られるようになったのが幸いし、充実し安定した研究会になりました。



小島 基男 教授

はじめの頃から、原則として隔週の土曜10時からやることになっていて、ずうーっと、今まで約10年間位続いてきました。

馬場：私はこの資本論研究会をやってきて、自分の考えをまとめるのに非常に役に立ちました。だからもし、これから何か少しでも学問的に寄与するものが私にできているとしたら、この資本論研究会のおかげでしょうね。

Q：九大時代の資本論の読み方と、何か違いはありますか。

馬場：九大の場合には文章を読むときに段切りということはそう問題にしない。しかし本当の本の読み方というのは段切りからはじめないといけないのかもしれない。その辺が違うと思いましたね。これは恐らく、ご出席のいく人かの先生方が育った東北大学の研究会のもち方などとの違いからくるのですかね。それから段切りを問題にするということですから、九大でのやり方とちがってスマートじゃないかな。つまり地についての論理の展開のし方ができる。

Q：それで論文の方も81年に「価値法則と生産価格」を書かれてから、立て続けに地代論、生産価格論を書かれて、従来の問題意識を整理されつつ新たな展開を出されたと思うのですが、従来書けなかった部分で新たに書けた部分と札大時代に纏まったものといいますとどうということなんでしょう。

馬場：一つ、二つと数えていきますと、農産物価格の限界原理を批判して平均原

理に持っていかなければいけないと考えていましたが、この批判は独占資本主義論序説の中の平瀬已之吉批判でもう終わっていると思うんです。それから価値法則の仕組みと自然法則の二つを組み合わせたものを考えてきましたが、価値法則の仕組みについては、元田先生に少し読まれ過ぎている感がありまして、「それはどうなっていますかね」って聞かれて「実は解決していない」って答えてね。合わせると価値法則の仕組みももう少しはつきりしてくると。

Q：札幌大学に1968年から91年の21年おられたわけですが、この札大時代全体のご感想はいかがですか。

馬場：忘れられないことは、札幌大学の経済学部の一員として経済原論を講義してきたことです。わたしは同じ講義を同じノートで喋るのは性に合わないということがありまして、必ず「資本論」を読み直しながら正すところは正す、それなりに説明したのによくわからないときはわかるように講義し直すということをしてきた。忙しい中でも良心的にやっただろうと自ら思っております。このようにできたことを感謝しております。もう一つは研究面でいい仲間と一緒にやれたことで、これもわたしの学問の一生を支えてくれたものであると思います。学問の道については、これからどれだけできるかわかりませんが、これからいくらかでも伸びるところがあると思えば、研究会で培った力でやったおかげだと思えます。これでなんとか研究の成果を具体的にまとめて残してみたいと思えます。

Q：先生は、今までの研究をまとめられて『価値と価格』という表題の本を出版される予定でして、一応の集大成をされることになると思うのですが、最後に、これからの先生の学問研究の課題ということで、一言お願いします。

馬場：元田先生から聞かれたんで、資本主義が自然法則から乖離しながらそれなりに生きている力は何なのか、それを築いている仕組みは現代に来てどう変質しながら今日の資本主義を支える力となっているのか、いってみれば「現代の経済原論」というのを出して経済政策論をやる方にも一定の理論を提供できるように、まとめてみたい。これは、いま経済学部の特設講義で展開すべくやっておりますので、今までよりは、少し早や目に出来上がると思えます。

司会 馬場先生は、各種の雑事から解放されてからも、たゞちに勉強にとりくまれてきております。早朝、生酢をキューツと一ぱいのんで、1時間以上もジョギングして汗を流されてから机に向かわれている毎日と承っております。以前よりはずっと顔色もよくなって、元気に学問に取り組まれております。今後ともお元気に、資本論研究会をはじめとして、よろしくご指導の程お願いいたします。

長時間、ありがとうございました。